

(9) イチジク

主要病害虫別防除方法

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
疫病 (<i>Phytophthora</i>)	①葉、果実、枝の罹病組織は早期に除去して処分する。 ②密植を避け、通風を良くする。 ③土壌からの一次伝染を防ぐため樹冠下に敷きわらをする。 ④排水を良好にする。	①6～7月に農薬を散布する。 (例) 銅水和剤(コサイド3000、Zボルドー) ②収穫期間中に農薬を散布する。 (例) アズキシストロビン水和剤(アミスター10フロアブル) シアゾファミド水和剤(ランマンフロアブル) TPN水和剤(ダコニール1000) マンジプロバミド水和剤(レーバフロアブル)
【参考事項】 前年の病果、病葉などが土中に残り、厚膜胞子で越冬する。降雨が続くと多発しやすい。6～7月頃から発生し、葉の発病が多いと果実に多発する。7月と9月に発生のピークがある。銅水和剤(コサイドボルドー)は葉害を生じる恐れがあるので炭酸カルシウム水和剤(クレフノンなど)を加用して使用する。銅水和剤(Zボルドー)は、日照不足、多雨などの条件で葉害を生じる場合があるので使用時期に注意する。TPN水和剤(ダコニール1000)は、果実肥大期の初期あるいは夏期高温時の散布は葉害を生じることがあるので使用をさける。現在、本病に適用のある農薬は治療効果が期待できないので、早期の予防散布を心がける。		
酵母腐敗病 (<i>Conidia, Pichia</i>)	①発病果は早期に除去して処分する。 ②収穫遅れをなくし、適期収穫を励行する。	①収穫期にショウジョウバエ類に適用のある農薬を散布する。 (例) アクリナトリン水和剤(アーデント水和剤)(ショウジョウバエ類) クロルフェナピル水和剤(コテツフロアブル)(ショウジョウバエ類) スピネトラム水和剤(ディアナWDG)(ショウジョウバエ類)
【参考事項】 ショウジョウバエ類の媒介により伝染する。成熟した果実の小果や花托に発生し、発酵臭を伴い、腐敗を生じる。露地栽培では、降雨後に被害が急増する。		
黒かび病 (<i>Rhizopus</i>)	①発病果は早期に除去して処分する。 ②密植を避け、通風を良くする。 ③雨よけ栽培を導入する。 ④傘掛けをおこなう。	①熟期に雨が多いと多発するので、農薬を散布する。 (例) イプロジオン水和剤(ロブラール500アクア) TPN水和剤(ダコニール1000)
【参考事項】 病原菌は土壌中や空気中に存在し、風媒伝染するほか、ショウジョウバエなど昆虫が媒介する。果実の罹病性は果実の肥大に伴って高まり、熟期を迎えた果実に感染する。		
さび病 (<i>Phakopsora</i>)	①発病葉を集めて処分する。 ②密植を避け、通風を良くする。	①初発時に農薬を散布する。 (例) アズキシストロビン水和剤(アミスター10フロアブル) ヘキサコナゾール水和剤(アンビルフロアブル) ミクロブタニル水和剤(ラリー水和剤)
【参考事項】 病原菌は落葉上で冬胞子の形で越冬する。発病適温は25～30℃付近で、5月から及び8月下旬からの年2回発病する。		
炭疽病 (<i>Glomerella</i>)	①発病果は早期に除去して適切に処分する。	登録農薬はない。
【参考事項】 病原菌は菌糸及び分生子の形で被害果に付着して越冬する。8～9月の果実肥大後期に湿潤な天候が続くと発生が多い。		
株枯病 (<i>Ceratocystis</i>)	①苗は無病地で育苗する。 ②さし穂は無病圃から採取する。 ③発病株は早期に処分する。 ④排水を良好にする。 ⑤定植時にアルカリ資材で株元の土壌pHを7.5～8に矯正する。	①定植後及び5～10月の期間に農薬を灌注する。 (例) チオファネートメチル水和剤(トップジンM水和剤) チオファネートメチル・トリフルミゾール水和剤(ルミライト水和剤) テブコナゾール水和剤(オンリーワンフロアブル) トリフルミゾール水和剤(トリフミン水和剤) 銅水和剤(ICボルドー66D) ベノミル水和剤(ベンレート水和剤) ②収穫後から休眠期にペースト剤を主幹部に塗布する。 (例) チオファネートメチルペースト剤(トップジンMオイルペースト)
【参考事項】 土壌及び苗木伝染する。ほ場内では病斑上に形成された分生子、子のう胞子、厚膜胞子が風雨などによって運ばれて伝染する。地温が25～30℃で発病が多い。湿潤条件は発病を助長する。病原菌はpH8前後で発育が抑制される。銅水和剤、テブコナゾール水和剤の灌注処理は、苗木では葉害が発生するため、3年生以上の樹に使用する。		

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
アザミウマ類	<p>①園内及び周辺の雑草を除去する。</p> <p>②樹冠下に光反射シートを設置する。できれば園外周部にも設置する。</p> <p>③幼果の果頂開口部をサージカルテープなどでふさぐ。</p> <p>④園外周部を0.8mm目合いの赤色ネットで囲む。</p>	<p>①5月下旬以降に果頂部から侵入するので、この時期から農薬を散布する。 (例)</p> <p>アセタミプリド水溶剤 (モスピラン顆粒水溶剤) クロチアニジン水溶剤 (ダントツ水溶剤) クロルフェナピル水和剤 (コテツフロアブル) (ヒラズハナアザミウマ) スピネトラム水和剤 (ディアナWDG) スピノサド水和剤 (スピノエース顆粒水和剤) チアメトキサム水溶剤 (アクタラ顆粒水溶剤) トラロメトリン水和剤 (スカウトフロアブル) フルキサメタミド乳剤 (グレーシア乳剤)</p>
	<p>【参考事項】 主に成虫で越冬する。年5～8回発生する。果樹のほか果菜類、豆類、花き類、雑草など多くの植物に寄生し、花や幼果を加害する。一般的に梅雨期以降は発生及び被害も減少するが、8月以降もイチジク園内で多数捕殺され、中上段果実も加害されることがあるので注意が必要である。</p>	
カミキリムシ類	<p>①成虫を捕殺する。</p> <p>②食害部を見つけ針金などで刺殺する。</p> <p>③白色反射マルチシートで主枝及び主幹部を覆う。</p>	<p>①株元から結果母枝まで農薬を塗布する。 (例)</p> <p>MEP乳剤 (ガットサイドS)</p> <p>②産卵期～幼虫喰入期に主幹及び主枝の産卵箇所農薬を散布する。 (例)</p> <p>アセタミプリド水溶剤 (モスピラン顆粒水溶剤) (キボシカミキリ) クロチアニジン水溶剤 (ダントツ水溶剤) スタイナーネマ カーボカプサエ剤 (バイオセーフ) (キボシカミキリ幼虫)</p> <p>③成虫発生初期に設置する。 (例)</p> <p>ボーベリア ブロンニアティ剤 (バイオリサ・カミキリ) (果樹類)</p> <p>④クワカミキリ幼虫には、食害孔から農薬を注入する。 (例)</p> <p>ペルメトリンエアゾル (園芸用キンチョールE) (クワカミキリ)</p>
	<p>【参考事項】 幼虫で越冬 (樹幹内) する。キボシカミキリは年1回 (ときに2回)、5～10月に発生する。クワカミキリは2年 (まれに3年) に1回、7～9月に発生する。</p>	
クワハムシ	<p>①周辺の雑草を除去する。</p>	<p>登録農薬はない。</p>
	<p>【参考事項】 老熟幼虫で越冬 (土中) する。成虫は年1回の4～6月に発生する。幼虫は根を加害する。</p>	
ハダニ類	<p>①園内の雑草を除去する。</p> <p>②乾燥が続くと多発するので、土面に敷わらや灌水をして、過度の乾燥を防ぐ。</p>	<p>①発生初期 (6月中旬～梅雨明け直後) に農薬を散布する。 (例)</p> <p>エトキサゾール水和剤 (バロックフロアブル) シエノピラフェン水和剤 (スターマイトフロアブル) 脂肪酸グリセリド乳剤 (サンクリスタル乳剤、アーリーセーフ) ピフェナゼート水和剤 (マイトコーネフロアブル) ミルバメクチン乳剤 (コロマイト乳剤)</p>
	<p>【参考事項】 成虫で越冬する。年10～11回発生する。薬剤抵抗性ハダニの発生を抑制するために、同一系統薬剤の連用は厳に慎む。</p>	
ネコブセンチュウ	<p>①根の活力を高めるため、中耕を実施する。</p>	<p>①4月下旬の敷わら前に農薬を施用する。 (例)</p> <p>パストゥリア ペネトランス水和剤 (パストリア水和剤) ホスチアゼート粒剤 (ネマトリン粒剤、ネマトリンエース粒剤)</p>
	<p>【参考事項】 全てのステージで越冬する。年4～5回発生する。5～6月、9～10月の増殖が大きい。</p>	